久里浜住吉神社裏洞穴遺跡

赤星直忠

横須賀市久里浜海岸に古社住吉神社がある。この社は第三紀の逗子層に属する凝灰岩及び泥岩からなる岩山に鎮座する。戦時中この岩山が海軍防備隊の陣地として縦横にほりぬかれた時、一坑道から人骨多数が発見された旨を終戦後聞知したので、昭和二十二年十二月同所大住正蔵氏の案内でその場所を確かめ、調査したものである。現場には木箱入の骨と若干の貝殻が残されており、坑道工事は中止されたままになっていた。工事は偶然海蝕洞窟を側面から切崩したもので、洞窟は横穴古墳に利用されていたものである。本報告はこの時、記されたものである。

洞穴は住吉神社のある岩山の正北端から南に向って汀線上三米許のところに存在したものであるが入口が崩壊したため外部からは全く知ることが出来ない状況にあったもので、坑道はこの洞穴の略中央部に掘りあてたものである。洞穴は堀進中の坑の上半部にあらわれたため、此の部分に於て東側面及び底を切崩され、且洞の北部（入口に近い部）を満していた崩壊土が切崩岩塊と共に運び去られ、これに伴い、洞穴の下半部を埋めていた岩塊及び砂層も同時に運び去られたもので、この砂層上に横たえられていた人骨が作業員の注意するところとなり、その大部分が木箱に納められたものと思われる。而してこの時人骨に伴った土器や直刀の出土により、作業員の興味を喚起したものらしく、残存洞穴中の岩塊及び砂層は大部分かき出され、残る部分も深く掘り起されたものの如くである。終戦後ここから土師器坏の完形品を拾得したといわれているが或はその時残部が掘り起されたものであるかも知れない。

洞穴断面は斜に立てた平行四辺形に似た形をなし、天井はせばまり、底は西よりに狭くなっていた。全長一八メートルあるものの如く、坑道中止部分から入口の崩壊部まで略四メートルあり、残存奥部は次第に底面が高くなっており、上半空洞部分の高約五〇センチ、下半部の下半は岩塊、上半は砂層である。その上に若干の岩塊が覆っている。この部から奥は更に狭くなっているが尚三メートル以上の奥行がある。既発掘部の側面に残存する砂層においてみると下方の岩塊は波のために洞内に運搬され打上げられたものと認められ、その上に厚く覆う砂層もまた波のため打よせられて堆積したものであるが、この砂層の上面に大形のアワビ、サザエ、カキその他が敷きならべられているのは葬穴として洞穴が使用された際の施設と思わねばならない。この貝の間に一骨片が残存していたこともこの間の事情を物語るものと思う。洞穴内に如何なる状態で人骨が横たえられていたかは全く不明であるが木箱（林檎箱二個）に納められた人骨量から数体あったものと思われる。

副葬品の存在はこれが葬穴に用いられたこととその年代を物語るものであるが、洞穴中の岩塊及び砂の大部分が搬出せられているため、副葬状態は全く不明である。終戦後坑内に坏の完形品があったと伝えるのは人骨と共に木箱に入れられてあったものか、残部が発掘されたものか明らかでないが発掘されたものとすれば他の副葬品も失われたと考えねばならない。調査の時には木箱外に土師器坏断欠数個が大形の貝殻と共に散乱しており、箱の中には人骨と貝殻と僅の副葬品があったにすぎない。人骨が拾い上げられた時も当然副葬品の若干が目にとまったものと思われるが多くの遺物は岩塊と共に運び去られたものであろう。検出遺物は次の如くである。

土師器断欠――(イ)坏四片、何れも肩に張出のないもの。(ロ)深鉢一、復原高一二センチ、口径一四・五センチ、平底。

直刀断欠――残部でみると比較的保存がよい。

鉄鏃断欠――尖根一、身部剣形。平根二、Aは長三センチ、幅二・八センチ、極めて短い篦がある。身の中央に小円孔を貫く。Bは身部根元から折損したもの、身の中央に円孔がない。一般形のものであろう。

骨鏃断欠――篦部を含む断欠。身部の大部分を欠く。身部の根元に丹色を塗る。

貝釧――長径七・六センチ、短径五・五センチの楕円形。釧幅九ミリ。一個。

金銅環――一個。長径二・六センチ、短径二・四センチ。鍍金。比較的軽いから中空か。

底に整かれていたと思われる貝殻は次の如くである。アワビ（大部分大きい）、カキ（頗る大きいものが多い）、サザエ（大小ある）、ベンケイガイ・イガイ・オニアサリ・ウシノツメ（大きいものが多い）、オーノガイ・ウチムラサキ・オーヘビガイ（少い）、アカニシ（少い）、ヤツシロガイ（少い）。

洞穴を古墳時代以後の葬穴として使った例は三浦半島では市内鴨居鳥ヶ崎洞穴、三浦市南下浦町毘沙門A洞穴、C洞穴、松輪さぐら浜洞穴、大浦山洞穴などがあり、何れも入口に頭をむけた方向に葬られていた。本穴でも恐らくそうであったと思われる。これら洞穴例では下に貝を敷いた例は大浦山例だけだが、横穴底部に貝を敷いた例は市内鴨居鳥ヶ崎横穴、同公郷滝が崎横穴、同吉井横穴などにあり、これらは波でさらされた貝を用いており何れも小形のものを使っていた。大浦山洞穴例だけが大形のアワビやサザエなどを使っていた。本洞穴は副葬品からみると古墳時代末期に属するものの如くである。尖根式鉄鏃の身が剣形のものは鳥ヶ崎横穴では明らかに古墳時代末期のものから出ていた。平根式鉄鏃の篦がなく或は極めて短かいもので、中央に小円孔を貫くものは市内佐島横穴から出土しており、横穴としてはやや古いものから出ている。貝釧は鳥ヶ崎横穴、佐島横穴等にこれも同じくやや古いと考えられる横穴から出ている。このように副葬品からみると、本洞穴の埋葬は古墳時代末期に属するものとしてよいようである。出土遺物中、金銅環が軽いのは中空のためかと考えられ、中空金銅環は三浦半島ではじめての出土例である。骨鏃例

も少いものだが三浦半島では佐島、吉井の各横穴から出ている。貝釧例も少いものだが前述の如く鳥ヶ崎、佐島各横穴から出ており、原料の貝名は不明だが放射状に筋が残っている。ウシノツメやマツバガイなどの大形のものが使われ、表面をすりへらしたものであろう。

洞穴遺跡は少いものであり、且つ葬穴として使われた例は更に少い。本例は戦時中、軍工事によって偶然発見されたものであるため、発見当時の事情が全く不明であり、終戦後幾人かの者が既にこの場所に入っているなどのため、遺物の持ち去られたものも若干あるらしい。しかし幸にも僅かながら取残された遺物があったので大要を知ることが出来たものである。遺物中特記さるべきものは貝釧、骨鏃、極めて短い箆を有する平根鏃、中空と思われる金銅環などがあり、これら遺物から本洞穴が葬穴として使われた時期を古墳時代末期と考えるものである。

（昭和二十三年一月稿）

遺物発見地名表（二）

横須賀市衣笠町石切場	縄文土器片（十三ボダイ式？）	鈴木角太郎
同　小矢部町衣笠公園	弥生式土器片（時期不詳）	赤星直忠
同　平作町石井不動付近	布目瓦	同
同　野比病院海岸	弥生式土器片（時期不詳）	同
同　八幡町八幡社付近	布目瓦・埴輪断片	同
横浜市金沢区室の木	縄文土器片（十三ボダイ式）	塚田明治
三浦市三崎町鵜ヶ島台	同（野島式鵜ヶ島台式茅山式）	横須賀考古学会
会　同　同	プレ和泉式土器片、竪穴	同
同　同　向ヶ崎	埴輪	浜田勘太
同　同　城ヶ島	弥生式土器片（須和田式）	同
逗子市池子トンネル上	縄文土器片、石鏃	服部貞夫
同　池子	和泉式土器片	逗子小学校児童